

鈴木 清造（すずき・せいぞう）

1、プロフィール

昭和初期の旧制中学・官立高校・大学などでの作歌に始まり、中国での捕虜体験・戦後の教壇生活を通して生活を淡々と詠っている。

<生没>

1911(明治 44)年7月 16 日 ~ 1976(昭和 51)年 10 月5日

<代表作>

歌集『落穂』

<青森との関わり>

旧制弘前中学・官立弘高・東京帝大を経て青森女子師範・弘前市教育委員会・弘前実業高校を歴任した。

2、作家解説

歌人。明治 44 年7月 16 日、弘前市に生まれる。旧制弘前中学校・旧制弘前高等学校を経て昭和 10 年東京帝国大学文学部教育学科を卒業。この間甲虫短歌会（弘前中学）、弘高短歌会などで歌の素養を積む。大学卒業後、東京の小学校、秋田の商業学校、青森高等女学校、青森県女子師範学校を歴任、17 年召集を受けて中国山西省に行き、21 年上海から帰還。大学1年、それまでの歌稿を失うという、不幸な事件があったが、それにめげずに旧稿を収集し歌作を続けた。学窓での作品、戦争中の作品の中にも単なる生活詠にとどまらないものがある。22 年以後、地元の市役所・教育委員会に勤務したのち、35 年弘前市立女子高校に転じ、弘前市立実業高校に勤務する。41 年同校内の「なるしすの会」から歌集『落穂』が出版された。41 年から 51 年まで津軽短歌社の代表であった。定年退職後の 47 年から弘前学院大学教授となった。51 年 10 月5日没した。

学生時代の二首

踏切の女の持てる旗に似て柵べを近みダリヤ咲きたる
街燈のまだ消えやらぬ朝の町寂びれし光(かげ)に霧の流れたる

3、資料紹介

○『落穂』

図書

1966(昭和 41)年7月1日

180mm×140mm

462 首が「旅情」(昭和 10～40)、「落穂」(昭和2～9)の二部に構成されている。第二部は、失われた青春の歌稿を収集して成った。このことは著者の書いた後記でふれられている。序文は小田桐孫一が書いた。